



平成十四年三月

各務原市資料調査報告書第二十六号

かかみ野の 女性たち



各務原市歴史民俗資料館

1987年11月27日

かかみ野のはなたち

各務原市資料調査報告書第26号

かかみ野の女性たち

これ以上の女性史はない

各務原市教育長 浅野 弘光

一、全国に向けて発信できる女性史

本書「かかみ野の女性たち」は、小林瑠璃子さんを中心に会員すべての皆様、自分の体験を自分で掘り起こし、自分でまとめて書き、女性史としてまとめた本です。しかも、足立秀成氏を同輩の師として、自分たちで編集し補足、修正して創り上げたことは、この発刊自体が女性の活動の新しい道を開く事業として価値が高いと敬服しています。

また、内容の一つひとつが生きた生活の証として綴られていることは、女性の生活のダイジェスト版でなく、**体験を再現できる史実であり貴重な資料である**と思います。

その上、市内の那加・蘇原・鶴沼・稲羽の旧四町の女性を網羅し、**主婦の目からみた地域社会**を表しているところに、再びつくることのできない地方女性史の価値を見付けました。

まさに、全国に向けて発信できる地方女性史であると共に**女性に課せられた状況**を見事に描き出した芸術作の匂いすらあります。

二、分の中で生き抜く女性のたくましさ

「山の子は男の子だけの年中行事ですが、合宿を行うにあたっては、女性の助けが必要でした」と書かれています。歩くにしても男性より先に歩くこともなく、お風呂でさえ「しまいぶろ」の位置付けが女性でした。しかし、男性優先の行事も女性の助けなくしては、はかどらなかつたのです。**女性は分をわかまえないながら、確実に生活をたくましくリードして**きました。

「芋の煮えたは、箸さしや分かる、豆腐の煮えたは浮きや分かる。」など生活技術の歌も生み出してきました。その発展は「女性みこしのつり手」として現在にも繋がっているのです。

その上、女性は風俗、芸能の伝承者として、さらに、日本人の心と躰の伝達者として活動してきました。すばらしい本の内容です。

「かかみ野の女性たち」は過去の記録だけではありません。苦しみを乗り越えてきた生活記であり、市内の皆様そして**小中学生のみなさんに贈る宝物**です。各務原市のベストセラーになることを願っています。最後になりましたが、担当の歴史民俗資料館の皆様と関係された皆様のご支援に感謝して挨拶とします。

例言

一 本調査報告書は、江戸時代から明治、大正、昭和を経て現在に至るまでに、各務原市内の女性たちがどのような思いで時代時代を生き抜いてきたのかを調査し、執筆したものです。

二 本調査は、各務原市女性史の会（代表小林瑠璃子氏）が進めてこられ、それをもとに市教育委員会歴史民俗資料館が協力して編集・刊行にあたりました。

三 本書は、「産業と女性」「行事と女性」など、それぞれの事柄に対して時代時代で市内の女性たちがどのように関わってきたのかを中心に記述しました。また、記述に具休性をもたせるため女性史の会に寄せられた市内在住の方からの手記を多く引用しました。

四 手記によっては、現在では不適切と思われる表現を使っている場合もありますが、できるだけ当時の様子、雰囲気
気を正確に伝えるという趣旨で原文のまま掲載しました。

五 掲載した写真も、一部を除き女性史の会に寄せられた市内在住の方の写真を使用しています。

六 資料提供者並びに協力者及び調査・編集委員の方々の氏名は巻末に一括して掲載してあります。

七 本調査報告書の編集は、各務原市歴史民俗資料館指導主事高橋佐千夫が担当しました。

目次

第一章 近世・近代の女性

第一節 近世の女性	2
第二節 明治・大正期の女性	4
旧憲法	4
良妻賢母と戦争	5
濃尾大地震と北海道開拓	6
大正のデモクラシー	6

第二節 養蚕	16
--------	----

第三節 商工業	20
---------	----

一 那加一、六市	20
二 工業の歩み	21
三 運送業	25

第三章 行事と女性

二十四節 気と行事	28
第一節 正月の行事	31
第二節 春・夏の行事	33
第三節 秋・冬の行事	36

第二章 生産と女性

第一節 農業	10
一 戦前の農業	10
二 戦時体制下の農村	10
三 戦後の農業	11
(一) 農地解放と農協の成立	11
(二) 各務原開拓地(現朝日町)	11
(三) 畜産の動き	12
(四) 農家主婦の戦後の生活史	14

第四章 習俗・芸能と女性

第一節 習俗	42
一 お産にかかわる習俗と伝承	42
(一) はじめに	42
(二) 岐阜近郊の言い伝え	42

(三) 妊娠、出産の通過儀礼	43
(四) おわりに	44
二 結婚	45
(一) 明治初期の結婚	45
(二) 嫁入りの準備	45
(三) 結婚式・披露宴	45
三 葬送	47
四 法事	48
第二節 芸能	49
第三節 わらべ歌	53

第六章 信仰と女性

観音講の集まり	72
寺まいり	73
墓の守	73
地蔵さんのよだれかけ	74
地蔵祭	74
庚申様のご馳走	76

第五章 生活と女性

第一節 衣生活	58
一 大正・昭和初期の衣生活	58
洗張りと伸子張り	58
衣生活を支える戦前の裁縫教育	58
お針子さん	59
二 戦時中の衣生活	61

第一章 近世・近代の女性

第一節 近世の女性

第二節 明治・大正期の女性



第一章 近世・近代の女性

第一節 近世の女性

作家永井路子女史は「幕末維新を生きた十三人の女達」の中で、江戸時代における女性自立の芽生えの一つとして、女の旅を挙げて居られます。江戸時代の女性の地位は全くといえる程無視され、夫の家の私的奴隷ともいえる過酷な時代であったにも拘わらず、その環境に飽きたらず自分の足だけが頼りの旅に出たのです。普通、江戸時代の女の旅には厳しい制限があったように云われてきました。いわゆる「出女と入り鉄砲」つまり箱根の関所を女が出ること、鉄砲を持った人間が入ってくることは全部禁止されていたように思われがちでした。実際は人質になっている大名の奥方が本国に帰ることが禁じられていただけで、旅行手形を持っているれば一般の女性の旅まで制限されていたわけではありません。

当時の社会情勢は嘉永六年（一八五三）ペリーの来航を始めとして、安政元年（一八五四）日米和親条約（不平等条約）締結、攘夷派の反発、安政の大獄、大老井伊直弼暗殺など政情不安の時代でした。然し地方の農村では、旧来の制度に変わりはなく、農具や種子の改良、肥料の開発、副業の発達などによって地主層や商業が発達して経済はとみに高まり、庶民の生活に余裕が出来、趣味嗜好も多くなつたと思われれます。これはごく限られた階層であつたと想定されますがこの時代の側面の一部を見ることが出来ます。

各務原市域における幕末維新期の少ない資料の中にも女性の旅の例がありますので紹介します。

安政五年（一八五八）各務郡伊吹村の勝次郎女房小えが同村の浄土真

〈読み下し文〉

岩田敏三郎（第二十三代美濃郡代）の支配所濃州各務郡伊吹村住人、勝次郎女房小えと申す者が今般大和巡りを願ひ出たため、その願ひを聞き届けてやりたいと思ひます。

この者の宗旨は代々浄土真宗で当寺の旦那に間違ひなく御法度の御宗門類族ではありません。

この者もし途中で病死した場合は、その土地の御作法によつて葬つて下さい。その節御厄介ながら私共まで御書状をいただきます様お願い申し上げます。

安政五年（一八五八）午四月

美濃国各務郡伊吹村

浄土真宗

桂雲寺

関ヶ御所

御役人衆中

宿々同屋中

村々庄屋中

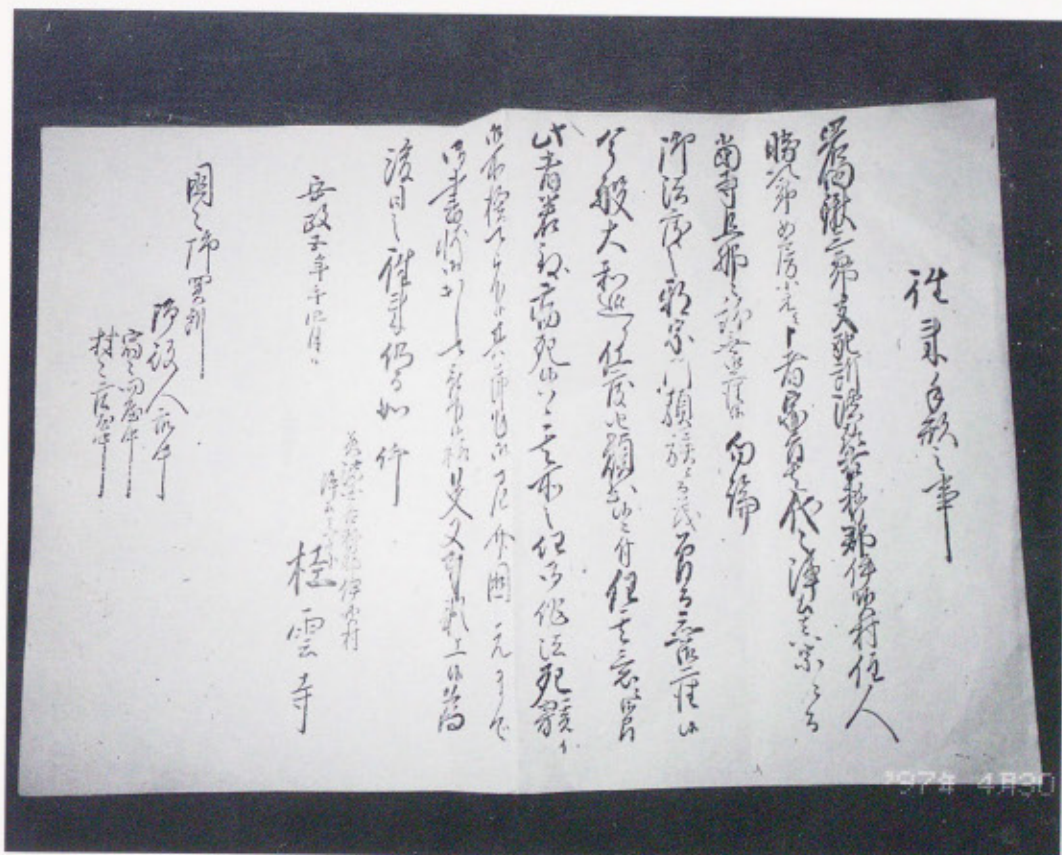
本人の日記もないので、詳しいことは分かりませんが、道中の苦勞や不安はいかばかりかと思ひます。当時の女性は充分勇氣があり強さも持ち合わせていたと考えられます。

その他安政六年末十月羽栗郡下中屋村ゆ勢が四国八十八ヶ所巡りを申し出ていること、さらに万延元年（一八六〇）申八月山脇村新八並びに

宗桂雲寺に、大和巡りの往来手形を出してほしいと願ひ出ています。

ここに当時の「往来手形」の文面を紹介いたします。

〈その一〉



往来手形(安政5年)

み江が諸所参詣したく山脇村庄屋恒右衛門へ願ひ出の例、また万延二年西前渡村新兵衛女房いとが京都の本山を始め諸国霊仏道場の参詣を上中屋村上徳坊に願ひ出ています。

次に山脇村新八並びに女房み江に出した往来手形（読み下し文のみ）を紹介いたします。

〈その二〉

〈読み下し文〉

一 濃州各務郡、山脇村新八並びにみ江と申す者たちが、この度諸所へ参詣致したいと願ひ出ましたので、これを許可したいと思います。この者の宗旨は代々東本願寺で旦那寺は同州羽栗郡下中屋村の河野西入坊の旦那に間違ひ御座いません。

一 御公儀様御法度の切支丹宗門の筋目の者、当人は申すに及ばず、親類に至るまで一人も御座いませんので御所と間違ひなくお通し下さい。もし方一歩いでいる内に日が暮れてしましましたら、一泊させてやって下さい。又もし途中で病死した場合にはその土地の御作法に従つて葬つてやって下さい。ここに寺請け往来を添えて御願ひ申し上げます。

万延元年（一八六〇）申八月

坪内主計知行所

各務郡山脇村

庄屋 恒右衛門 印

関ヶ御所

宿々御同屋衆中

村々御役所衆中

ここに二例を挙げましたが、その他下中屋村のゆ勢も、前渡村いとも同様の往来手形を貰っています。この二例などは神社、仏閣参詣と物見遊山の旅（大半のもの）ですが、なかには、文芸の修業の旅とか、遊吟・画賛・弾琴の旅とか、家族同行の学問の旅など、人さまさまの旅がありますが、これ等は自らの意思に基づいた自発的な旅であります。なかには、他から強制されてせざるを得なかった旅もあります。例えば藩主の命令で上京しなければならぬ旅とか、夫の任地への旅とか、お国替えの旅とか様々な旅がありました。そのことが女たちの文化的・思想的背景の向上に役立ったことは間違いないと思われれます。

第二節 明治・大正期の女性

近代における女性の歴史―女性にとって明治・大正という時代は一体何であったのか―というサブテーマで山本藤枝女史はつぎのように述べています。「警鐘は乱打されたが」として、新しい時代がきた、固くとざされていた扉もいまこそ開かれる、と。大きな期待に胸ふくらませていた心ある女性たちにとって、明治の初期、はなはなしくくりひろげられたオビニオンリーダーたちの胸のすくような男女同権論、男女平等論は、どんなに力強いはげましに聞こえたことでしょう。

明治三年（一八七〇）明治政府のできた翌々年、福沢諭吉は、はやくも「児童婦女のため」と称して「世界國尽」を書き「婦女を軽蔑するのは、真の文明開化に至らない半文明である」と言いました。おそらく男女平等思想の最初でしょう。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」の名文句で名高い諭吉の「学問のすすめ」は明治五年二月初刊行以来、

明治九年一月まで全十七

編刊行され、各編二十万部、総計三百四十万部以上売れたといわれる超ベストセラーですが、その八編は「男も人なり、女も人なり」というタイトルの男女の同権をほげしい言葉で述べています。

また進歩的思想家のグループ明六社の仲間だった森有礼も「妻妾論」の中で、妻妾同居の家を、人間の家でなく畜類の小舎

といってもよいと痛烈に批判をしています。こうした一部の指導者だけでなく庶民の中にも声なき声として男女の平等を願う者も多かったに違いないと思います。

旧憲法

明治二十三年（一八九〇）十月三十日憲法が發布され、「大日本帝国憲法は萬世一系の天皇之を統治する」（第一条）、「天皇は神聖にして侵すべからず」（第三条）で国は天皇のものであり、天皇は国民の父、国民はその赤子であり国民は天皇のために生命を惜しんではいけないという、忠君愛国の思想が、これで法制化されたのです。また民法も当然憲法を基



明治時代の人々

本としてつくられたものとなり、多少は近代主義が加味されたものの根本的には封建時代の武家法と大差ない新民法が公布（明治二十九年）され同三十一年に実施されました。この明治民法の中心は「家」であり「家」は戸主と家族からなり、戸主権なるものが設定されました。

つぎに市域の様子を書きたいのですが、資料が未見であるため残念ですが、池田郡小嶋村を例にあげたいと思います。

明治二十二年（一八八九）頃になると、県下各地では、「憲法拝読会」を尋演説会が新聞に掲載されるようになり、小嶋村では「憲法拝読会」を尋常小学校で開き、憲法の姿の見えないうちから県下各地で憲法に期待する集まりが開催されています。明治憲法が民主主義という点からすれば、不十分であっても、町村制とあいまって、当時の人々には新しい時代の到来を告げるものでした。人々は「自治」ということばに新しい時代を感じ、自由民権でなじんだ「権利」ということばを自己の味方につけようとしたのです。

良妻賢母と戦争

つづいて山本藤枝女史はつぎのように述べています。良き妻、賢い母について、言葉そのものには非のうちようがなく、しかしなにを以て「良」とし「賢」とするかによって、おのずから評価も変わってくるというものです。

自我を殺し、夫のために一〇〇パーセントの内助をつくす良き妻となり、健康な子供を生んで、その子をお国のために役立つものに育てあげよ。このかけ声に女性の大衆はなびき伏せられました。

また西欧先進国に追いつこうとして、必死に殖産興業にはげみ、富国

強兵をめざして進んだ日本は、明治二七・八年の日清戦争で清国に勝って、

まず東洋の日本の榮譽を勝ち得ました。そしてまた十年後のロシアとの戦争に勝って世界の日本としての立場を手に入れました。しかし日本の女性のみんながみんな、軍閥と為政者に飼いならされていたわけではありませぬ。明治三十七年（一九〇四）九月号の「明星」に与謝野晶子は、日露戦争たけなわのとき「君死にたまふことなかれ」という詩を発表したのをはじめ、大塚楠緒子、手塚明子など数々の先覚もいたと述べています。

ここに各務村史の兵事に関する記録の一文を紹介したいと思います。

明治新政府樹立と同時に諸般の制度は全く革新され、士農工商の階級は撤廃されて華士族平民の族籍となりました。ここに於いて、明治五年（一八七二）十一月二十八日徴兵令の公布と同時に詔書が下賜され、国民皆



日露戦争忠魂碑（加佐見神社）

兵の新制度となり、わが村よりも徴兵として入隊しました。(当時は長男は兵役に服することを免除され、次男以下の者のみその義務を負う)
明治十年(一八七七)の西南の役には出兵者はなく、日清戦役には十四名が従軍しましたが、全員が生還しました。また日露戦役には、従軍者六十二名のうち五十一名が生還しましたが残り十一名は護国の華と散りました。古今東西あとに残った家族ことに妻や母の苦勞は想像にあまりありません。

濃尾大震災と北海道開拓

明治二十四年(一八九一)十月二十八日午前六時三十七分、大野郡西根尾村を震源とする大震災は、人畜家屋は勿論、堤防、道路、用水路、溜池の破損はいちじるしく、耕地の荒廢も幅広く及び、もとより国・県の震災復旧もありましたが、庶民はその日の食べものにも飢えるという悲惨さでした。この窮状から抜け出すには「北海道開拓」という道しかなく、県も大いに奨励し、援助を与えました。県では岐阜殖民社とか、岐阜団体、大野団体、武儀団体などの団体を組織してみんな住み馴れた故郷や、親類、友人と身を切られるような思いをして、あてどもない新天地に向かい、その心境は計り知れないものがあります。

市域における移民についての記録はありませんが、平成十年四月に、飛騨・美濃合併二十周年の記念事業として「大志を抱いた人びと」を発刊するにあたり、いろいろと調査をしました。その際、予想以上の人びとが、この市域から移民していることがわかり、移民の困難さがわかってきました。

重い制裁が加えられること

二、工女の賃金支給の方法について

三、工女の教育及び風儀の取締りについて

四、工女の作業状態を種々な観点から賞点罰点をつけ、その点数に応じた給料を定めることなど

これらの細かい規定の中で、工女たちは、厳しい労働を課せられていました。しかし一般の家庭では、こうした規定はありませんでした。養蚕期ともなると、家中が蚕の飼育場所となり、これも厳しい仕事でした。次に当時を生き延びた一女性の記録をあげたいと思います。

宝林寺とわたし



現在の宝林寺(下切町)

わたしは今年(昭和四十八年)で七十八歳の老尼となりました。指折り数えますとわたしがこの曹洞宗・興聖山宝林寺住職を選んだのは五十三年前の夏でした。当時の寺は貧乏寺で檀家もなく、荒れるに任せてあって住むことすら困難な状態でしたが、ここに、どういう縁があったのでしょうか、ある人のお世話で入寺することになりました。岐阜の木田から前渡の下切までが大変で、今は

大正のデモクラシー

明治の激動の世相も大正になると、少しずつ自由の風が吹き、政治上の主権は国民にあるという、民本主義が民衆の中から盛り上がってきました。このことは従来では全く考えられなかったのですが、一大改革とも言うべきことでした。これが普通選挙をはじめとして、言論、集会、結社の自由を求める声となり、人びとはハイカラを好み生活スタイルも変化していきました。このことは諸産業にも及びましたが、その一つとしてここに蚕糸業について少し触れてみます。



大正時代のある家族

養蚕は米・麦・甘藷と並んで、農家の大切な収入源でした。これは生糸貿易の拡大によるもので、各農家は勿論各地に養蚕組合ができ、稚蚕の共同飼育や繭の共同販売、教師の招聘など活発な活動がありました。養蚕は女の仕事として扱われ、寝る間も惜しんで仕事をしました。企業者たちは業者間のトラブル防止や企業の円滑をはかるため、蚕糸会などをつくり、細かい規定などをつくったりもしました。その二、三の例をあげてみます。

一、工女の取締りに関する事項として、工女を雇い入れる場合は、組合員相互間の連絡協定を定め、それに違反したるものは定款上最も

バスとかタクシーで一時間ちょっとでこれですが、当時は忠節までゴトゴトと電車で二十分、忠節から柳ヶ瀬まで徒歩、美濃町行きの電車でまた二十分くらい、琴塚で下車、さあーこれからが大変で、世話をしてくれた人と、大きな信玄袋二つを振り分けに背負い、二里(約八キロ)余りもある道をゴングロ下駄で歩かなければならず、当時は琴塚から那加の山後までは一軒も人家はなく小学校(現、那加第一小学校)から新加納までも、ほんの僅か家があっただけの淋しい道でした。

新加納の林酒屋さんの東に五、六軒家がまばらにあって、それから下切までに一軒きり古びた小さい家があり、駄菓子や少しと、十本くらいのラムネが水の入った桶に入れて売っていました。二人はこの店で一本二銭のラムネを買い、しばらく休ませてもらって再び下切へと足を運びました。目的の各務原にたどりつき、一連隊(現、航空自衛隊)を右に見て、二つの大きな松林の中を通り抜けやっとの思いでついたものの、あまりの伽藍の見すばらしいのに驚き、果たしてこの寺で暮らすことができるかと気落ちしてしまい、その晩は眠ることもできませんでした。朝方になってやっと思え直し、まだ若いんだから(二十五歳)なんとしても頑張ろう、自分から希望して来たのだからと心に誓いました。それから近所の人々のお世話で十名余りの村の娘さんたちに裁縫を教える生計をたてなければなりません。

そんな時、寺の再建問題がもちあがりトントン拍子で話がすすみ、めでたく完成までしたが、さてお金の問題となり、村内や隣村の信徒の皆様からも沢山の御寄付を願いましたが、予算超過と申しました。予想以上の金がかかり金策に困ってしまいました。種々協議の結果、借金

前宮小学校大正13年度尋常科卒業生



をし、そのお金で村講をたてて毎年ポツポツ返金することにしました。わたしは当時のお金で三千円程の借金を引き受け、勤めることに決めました。ありがたいことに時の村長、村上文雄氏や校長水田新兵衛氏の薦めもあり、前宮小学校の一教員として働くことになりました。

小学校では十三年程お世話になったが、着任したときは月給十六円也の代用教員でした。いまの方はお笑いでしようが、当時代用教

員の給料としては優待でした。女子師範を出て初任給上が二十円、下が十八円だった時代で翌月から倍額となりました。十二年間ほとんど一年生のみを受け持ち、ほかに上級生の女生徒に裁縫と家事を教え、村に処女会ができてからは、もっぱら課業外は処女会の方を引き受け、若い娘さん達と楽しんだものでした。それまでは、娘さん達もあまり外出はされていなかったので、会に入ってから、珍しいのとお友達に会える楽しみとで、出席も良くとても真面目で秩序をよく守って活発な会を

育てられました。

わたしも、県主催の講習会に出席し、三年目には、尋常高等小学校の訓導を拝命し、大正十三年の五月には、全国教員大会出席を県から選出され、女子師範付属の稲垣先生と二人で上京致しました。

当時汽車賃は割引で往復八円でした。汽車の出す煙で煤まるけになりながらも、のんびりした旅でした。そしてついた東京といったら一年前の大震災（関東大震災）で未だ荒野と同様の状況でしたが、会場は幸い焼け残り、百名程の会員が収容できました。大会は二日間で終わり三日目は鎌倉から江ノ島と遊覧して帰郷しました。

小学校退職後は加納の寺に幼稚園ができそのお手伝いを頼まれ、その甲斐あって一カ年後には立派な加納幼稚園が開園され、私も保母として小学校の子供たちより小さい児を相手に毎日を送りました。下切から加納までの通勤は、高山線を利用していましたが、その頃の汽車も呑気なものでわたしがぬかるみの道を下駄の函をとられながら歩いていて「お客さんお乗りですか」と呼んでくださり汽車を止めて乗せてもらったこともありました。

第二章 生産と女性

第一節 農業

第二節 養蚕

第三節 商工業



第二章 生産と女性

第一節 農業

一 戦前の農業

明治になって殖産興業・武士の婦農の奨励などの影響もあって、各務野の開墾が試みられましたが、不毛の地と目されていた各務野の開墾は容易ではありませんでした。例えば明治三十年（一八九七）頃、大伊木や二十軒では「各務野の新開を三反持てば財産がつぶれてしまふ」と言われたほどの全くのやせ地で、本東郡根尾村や尾張方面等から開拓のため多くの移住者がありました。長くても数年で引き上げるのがほとんどで、住み着いた人はごくわずかでした。

しかし、明治末から昭和に至るまで、人々の粘り強い努力で山林、原野の開墾が進められていきました。柿沢に住むある女性は、開墾の様子を次のように振り返っています。

野村の開墾

私の生まれた家は柿沢にあつたのですが、私が生まれる前に、野村に原野を購入し開墾を始めました。柿沢から野村までは距離がありました。自動車も自転車もない時代ですから、毎日通うのは大変です。そのうちに小屋を作つてそこで寝起きしながら開墾を進めました。

松の木を切り倒し根を掘り出し、畑を作りました。その畑では主に冬は麦を、夏はさつまいもを栽培しました。

さつまいも作りは、三月の終りか四月頃のいも床作りから始まります。いも床は一番下に枯れ葉やわらなどを敷き、その上にこめかや鶏糞を入れ、その上に土を入れてさつまいもを並べ、その上に柔らかい草をかけます。

：九月十一月頃はいも掘りです。

いものつるを切つてから畑を備中鋤でおこし、いもを集めます。掘つたいもはわらで編んだびくによつて、家に持ち帰り大ききによつて分類し、むしろで作つた「たて」につめて出荷します。：（「戦時体験」より抜粋）



たて

二 戦時体制下の農村

農村地帯であつた当地域に軍國的体制の影響が及び始めたのは昭和六年の満州事変の頃からですが、昭和十二年の日華事変が起きるまではそれまでの農村社会の様相を強く残していました。

昭和十三年には農地調整法により小作料の統制・米穀管理・農地開発・農地作付統制・農業生産奨励及び統制等が昭和十六年まで次々と公布されました。

昭和十四年には国民徴用令、物価統制令の公布、各村に国防婦人会結成、召集や徴用で若人が郷土を出ていくと、留守居の女性たちには過重な任務が加わり、長期にわたる公用者住宅、遺家族への労力奉仕、慰問慰安などがありました。

昭和十五年には政府統制が強化され国民生活は窮屈になりました。物資の供出、配給制の拡大など戦時体制が強化されていったのです。航空基地周辺の農村部では肥料の欠乏と労力不足により、農産物の生産低下、

どんぐりの供出



農業荒廃への道を辿りつつありました。

昭和十六年十二月太平洋戦争が始まると更に若い労働力を軍に召集され人手不足となり、その上米の供出は強化され物資の統制は更に厳しくなり、農村は長期戦の母体の役割を課せられました。昭和十九年には食糧増産のため土地改良及び水田造成作業を実施して米麦の増収を計り、その他空荒地、河川敷も利用され雑穀類が作られました。更に学校の校庭も開墾されるようになりました。

しかし、こうした努力も肥料欠乏・労働力の不足を補うことはできず、農作業は老人、女性、子供に片寄る一方で、農産物の生産は極度に落ち込みました。一般の主婦は勿論、農家の主婦までが毎日の食糧確保に苦勞を強いられました。

三 戦後の農業

(一) 農地解放と農協の成立

農地解放 終戦後政府はGHQの指導により農地改革計画を作成し、不在地主、在村地主の有する全小作農地解放が昭和二十一、二十二年にかけて実施されました。田一反当たり那加で八百円という代金で売られ、全国平均をやや上回った程度でした。しかし戦後のインフレ下において解放農地代金はその価値を激減させ、「田一反が筵一枚より安い」とか「田一反、鮭三匹」と言われた混乱した時代でした。

農協の成立 昭和二十二年農業協同組合法が公布され、戦時中の農業会から農協へと変わりました。

昭和二十三年五月蘇原・前宮・那加・各務・鶴沼の各地で農協が設立され、さらに六月には更木・西市場も加わつて七農協となりました。

以上の二つの大変化は戦後の農村民主化の二本柱と言われるものです。

新円切換 昭和二十一年二月、戦後悪化してきたインフレーションを抑制するため政府は新円への切換を行いました。金融機関における預金は原則として支払いを禁止し、手持ち現金はすべて金融機関に預け入れて一定額だけ新円に引き換え可能としました。従来の通貨は三月二日限りで全額封鎖、毎月戸主三百円家族一人百円だけ引き出し可能となりました。このため生活費は極度に限定されましたが、物価の上昇は抑制できず混乱しました。このため勤労者家庭の主婦、農家の主婦も更に苦しい生活に追い込まれました。

(二) 各務原開拓地（現朝日町）

昭和二十年十一月、食糧増産と海外引揚者の職場確保のため政府が緊急開拓実施要領を決定し、鶴沼地区の旧陸軍飛行場跡が提供され二十一年二月に入植者が入りました。昭和三十年の記録に依れば、入植した農

開拓団の甘藷澱粉工場(昭和30年頃)



家は養豚・西瓜・メロンなどを生産し、さらに甘藷澱粉・ブドウ糖製造工場まで運営するなど意欲的な営農が行われました。しかし、昭和四十六年にはこの開拓地は市街化区域に組み込まれ急速に都市化していきました。この時代に入植、苦勞を経験された方の手記を紹介します。

入植の思い出

昭和二十一年、戦後の混乱の色濃く残っている朝日地区に、私たちは幼い子を連れて入植しました。三反歩程の飛行場の跡地と八坪の堀立小屋の板の間に、むしろにごさを重ねて敷き、井戸を掘りランブの生活が始まりました。

屋根の杉皮が薄く、夕立がくると家の中で傘を差してしのいだ時もありました。冬は雪が舞い込み、その上隙間から容赦なく風が吹き込んで、寒くて夜は早く床に入るより方法がありませんでした。

わたしたちは農業経験も知人もなく、お金にも困り、鍬、備中、鎌など一つずつ買って、主人が鍬を使えば私はスコップで土を掘り起こし、石ころを拾い、芝を抜いては一畝ずつ畑にしていきました。鋤鍬がほしいとどんなに思ったことか……

主人は公職追放で定職につけず、その上畑はやせ地で収穫が少なく、

養豚の思い出

昭和二十一年六月復員してきて初めて父の死を知り爆撃で廃墟となった庭に立った時の主人の気持ちはどんなだったろうかと今でも胸がいたみます。

老いた母と農業を知らない私のために主人は就職のお話も断り農業の道を選びました。私達は客からの出発でした。

麦と甘藷だけの農業から蔬菜さいばいに切りかえ、朝早くから畑に出て夕食もそこそこに市場へとそんな毎日でした。

子供から話しかけられても「あとでね」。ついに「お母ちゃんは何も話しを聞いてくれない」と、だんだんと会話も少なくなっていました。考えに考えた末、私は意を決して家において収入のある仕事と意思、その頃家において出来る仕事は養鶏か養豚しかないと主人に相談、何度も話し合った末、五年計画で主人は畑、私は養豚と作業の分担計画をたて、それからは朝と夕方は必ず家にいることにして、日中は今まで以上に働きました。

畑は六反を粟畑、柿一反、蔬菜畑を二反、飼料畑を一反と決め、草引き等手の足りない時は人を頼むことにして五年の歳月が流れました。養豚もたった二頭から十八頭になり雄豚も一頭入れました。

冬は授乳中の仔豚にとって流感が大敵。朝豚舎に入って三部屋の仔豚が冷たくなってころ横たわっているのを見たときは足がすくんでしまいました。そのため防寒用のビニールを幾日もかけて隙間なく張りましました。ビニール張りも豚舎の修理も勿論私の仕事で金植も鋸も上手に使いこなせるようになりました。

年賦の返還もあり、仕方なく主人が外に働きに出る日もありました。

お米を買えば薪がなく、薪のあるときにはお米がないという状態が続き悔しい思いをしました。

開拓を諦めて出ていく人もあって、一町歩程に増えましたが天井のある家が欲しいと懸命に働き、やっと古材で家を建てた時は嬉しかったのですが、だんだん養豚農家が増え、背中にハエをくっつけて帰るので、天井にハエがとまって真っ黒に見えた思い出も残っています。

ある時子供が「綺麗な社長の奥様でもこんなことすれば汚くなるよ。」と言ってなぐさめてくれました。

開拓の苦しい生活の中で、親子が強い絆に結ばれ、お盆やお正月のさやかな贈り物と御馳走をこよなく喜んでくれたことが懐かしく思い出されます。

(三) 畜産の動き

昭和三十年代以前は耕種農業の補助的、多角経営の一つとして家畜が飼育されていました。

養豚 古くから多くの農家で自家の甘藷を餌として一、二頭飼い、糞を畑の肥料にしていました。戦後は米軍基地周辺の残飯処理、加工用甘藷の副産物により養豚経営が拡大しました。しかし兼業農家の増加、飼料の高騰、豚肉価格の低迷、環境衛生問題の発生などにより昭和三十五年頃から飼育戸数は激減、逆に昭和五十八年頃には一戸平均三〇〇頭という多頭飼育に変わりました。

昭和三十年代養豚に心血を注ぎ活躍された手記がありましたので紹介します。

大きな凶体の豚は授乳の時、所かまわずタンと寝るので小さな仔豚の圧死が多く、防止の為の分娩柵は既製のものがあつたようでしたが、私は太い丸太(八センチ位)を四本と短い丸太二本を使い、分娩予定日の前日に取り付けます。太い番線ですっかり締めるとびくとも動きません。圧死の心配はなくなりました。

こうして冬はビニールで囲い、敷き藁を沢山使いますが、夜の出産の時はそれでも靴の下から冷えが上がつて来てガタガタふるようになるなり、あたたかい豚の腹の上に顔をふせるとついうとうとすることもありました。産まれると布できれいに拭いて天井から吊した赤外線灯で温められた箱に入れます。三時間おきに授乳し三日もすると箱の戸は開放しておけば勝手に飲んで箱に入って眠ります。



養豚の思い出

細かく記帳をはじめると意外なところに無駄があり、一番大きいのは飼料代。何とか少しでも経費をかけない様にと魚のあらを煮て麦をまぜ煮餅にしてみました。大きなかまどをきき大鍋で重油バーナーを使い炊きました。バケツで運んでいたのを運搬車にして労力の軽減も考えました。

県で畜産主婦サークルが発足し、市のサークルに地区で十二名入りしました。毎月一回夜勉強会を私の家でもち話がはずんで夜の更けるのも忘れる程でした。サークルで先進地の見学を計画し富山の石黒養豚場にお願ひし出かけました。その日は二、三の養豚場の見学をさせて頂き夜は婦人部の方と勉強会を持って頂き、そこでY・LのF1を母豚にしているお話を聞き翌日案内して頂きました。その豚舎は通路の両側に浅い溝があり絶えず水が流れ、汚物はそのまま田に流れるようになっていて清潔そのものの養豚場でした。(Y・Lとは、Yはヨークシャ、Lはランドレース、F1は交配した豚の事)

すくすく育っている仔豚を見てすっかりとりこになって帰りました。我が家にはランドレースもパークシャもいましたが、まさかF1を母豚にするとは思いませんでした。翌晩主人同伴で皆が集まりどうしても欲しいという女性軍に圧倒され導入することに決まりました。それこそ助け合い、話し合って出産の時を迎え成功しました。

この頃は煮餅をやめて配合飼料にし、緑餌はクローバー、コンフリーを毎日刈りに行きました。

この頃母豚二十四頭、雄豚一頭になっていました。二十四頭が年二回出産するとして一回最低八頭、矢張りとらぬ狸の皮算用で繁殖障害などは自給自足が多く、調味料の味噌、たまりは大豆を発酵させて作ったり、子供のおやつも小麦や米を粉に挽いてそれにさつま芋の餡を入れてつくったり、大豆や裸麦を炒り挽いて、きな粉やこがしにしたりして食べさせました。豆腐なども自家製でした。さつま芋の蔓などもおかずにして食べました。作物を作るにも肥料のない時代で、豚、鶏、羊などの家畜を飼いその敷き藁や糞などで堆肥をつくったり、落し肥えと言って人糞や尿を田畑まで天秤棒で担いでいって肥えにしたりで、大変な労働でした。

お百姓の衣類は綿を作ってそれを主婦が糸にし染め、紺色の場合は関まで歩いて染めに行きました。そのあと家の足踏み織機で織り野良着を仕立てて着ました。

農家の嫁は健康でよく働けばよい嫁でした。お姑さんには絶対服従しなければなりません。

子供がお腹に宿って臨月になり生まれる前日まで働きました。お産は自宅で陣痛がはじまると産婆さんにお願ひに行きます。すると、すぐ来て下さり手当てをしてもらい出産しました。

子供のおむつは大人の着古した浴衣などでつくり間に合わせるのがふつうでした。

子持ちだからといって育児に専念することはできませんでした。母乳を与えて置いて近くの野良仕事に出かけるか乳母車に赤ちゃんを乗せて出かけました。

歩けるようになると、いつも野良と一緒に出かけました。あまりおとなしいので探すと、びくを引っ張り出してその中に仰向けになって、かんかん照りの道の真ん中で眠っていることもありました。いとおしくて

思う通りにはゆきませんでした。我が家の年取の八割を占めるようになりしました。

毎月五日が仔豚の出荷です。この時は主人は勿論、登校前の息子も手伝ってくれました。

昭和四十三年十一月仔豚の品評会があり、四十八キログラムのF1を出したところ夕方「おめでとう、ごくろうさん」と最優秀賞の賞状を手渡してくれました。

昭和四十六年頃になると、ぼつぼつ公害問題もやかましく言われるようになり移転を考えていた矢先、道路の拡幅工事で豚舎の半分がなくなり切つてやめました。

酪農 昭和三十一年には市内で一九五戸の農家が三〇六頭の乳牛を飼っており、一戸平均一・六頭でした。そして四十一年には三・七頭、五十年には三〇頭、五十八年には三十八頭と年々多頭飼育となりました。当市の酪農は都市近郊の牛乳生産を目的としていたので、残菜に依存した形で産まれたが大規模にはなりませんでした。

養鶏 昭和三十一年には農家の六十パーセント以上が一戸平均九・三羽を飼っていましたが、戸数が減り羽数が増加する傾向に変わり、昭和四十七年には各務・須衛に養鶏団地が作られました。飼料の高騰、卵価の低迷により転廃業する人が出て規模は縮小していきました。

(四) 農家主婦の戦後の生活史

その当時の生活記録を紹介します。

戦後の生活

終戦後数年間は輸入もほとんどなく物資が不足していたので、農家で

涙が出ました。

夕暮れまで働いて西の山に太陽が沈むころ帰ると、すぐつるべで水を汲みお風呂に入れ、松葉や薪で沸かし、燗が出来ると夕食の仕度にかかります。夕食は寒い時期には大根や里芋、ネギなどを入れた味噌汁にうどんを入れる煮込みうどんを毎晩食べたものです。ご飯は何時も麦と米が半々か、米七分麦三分の割合でした。夕食が終わって主人が子供とお風呂に入ると追焚をしながら、中の主人と外のわたしがその日の出来事を話す少しの時間が何より楽しく嬉しい一時でした。皆が寝静まった頃、わたしは洗濯にかかります(朝は洗濯する時間がないのです)。小さいもの、大きいものなど干し終わるとわたしの一日が終わるのです。

田植えの準備も大変でした。麦を刈り取った後始末すべて手作業でした。今のように除草剤もなく草刈りも鎌を使つての刈り取り、手植えて田植えをし、あとの除草はすべて四つん這いになって取りました。どれも腰の痛いこと……今では考えられない作業でした。

秋のお米の収穫後は麦蒔きの用意、田起こしですが地下足袋が貴重品ですから素足で田に入りますので寒い年には足の感覚が無くなることもありました。

そのあとは山仕事。ガスがないので一年中の燃料を確保しなければなりません。松葉かきは女の仕事、山の上から背負って降りてきて、リヤカーや大八車で運びました。大変な重労働でした。

洗濯も井戸水をつるべでくみ取り、たらいに入れて手揉み洗濯でした。風呂水もバケツで何回も運び、松葉や柴などで沸かしました。今の人には理解できない当時の女性の仕事だったので。

もらい風呂

おじいちゃんが子供と入り、主人、おばあちゃんがすむと、両隣りの新家に声を掛けます。人の入れ替わる度にかげんを聞き、水を入れたり焚いたり、夜が更けてやっとならばはしまい風呂。湯は少なくぬるくなっています。焚いてくれる人はありませんでした。でもお風呂に入れるのは嬉しいことでした。翌朝湯垢をすくい水を足してもう一晩入ることが出来ると思い嬉しかったという思い出があります。

戦後のあるひとこま(嫁・姑)

出産に二度失敗し三度目の妊娠をした時、実家の母が心配して当時入手しにくい小魚の干物を持って来てくれました。

「そんな物くわんでも、わしは頭のええ丈夫な子を産んだ」と姑

「畑でそつと食べるというよ」と小声の母

「外で口うごかしているとあそこの嫁はいやしいと笑われる」と地獄耳の姑

それから二回実家から送ってきましたが、口にすることもなくかびてしまい、庭の隅に埋めました。

「お母さんごめんね」涙がこぼれて止まりませんでした。

当時の養蚕農家の様子を示す文を紹介します。

養蚕と母

最近、三十数年間も養蚕に関わってきた母の養蚕記録を見付けました。そこにはその仕事に打ち込んだ女の熱い情熱が感じられました。その時わたしはこの母を通して育まれた幼少時を視野に映ったまま農家の主婦の生活としてまとめてみようと思いました。

お蚕先生

風薫る五月のはじめ、農家では春蚕育成の準備が始まります。いつの間にか普段の居間は養蚕室に変えられていました。畳を上げたその部屋の両側には竹で組んだ二基の目棚が作られ、天井に届くまで十段程の棚が付けてあって、その棚の端の方に蚕をのせる竹製のサナが、重ねてさしてありました。

中央の筵の上に赤い素焼きの大火鉢が置かれ、その中には丸い練炭が赤々と燃えていました。蚕の小さいうちは部屋の隙間風を嫌って常に障子を閉め、目張りがありました。蚕は特に二眠までが大切で目が離せず、母は絶えず室温計に気を配って環境を整えたり、桑やりにも細心の注意を払っていました。そんな養蚕農家をお蚕先生が毎日指導に回って来られました。お蚕先生は家に入ってくるなり、にこにこして気の利いたジョークをとばし大笑いの中で疲れたお母さんたちの肩の凝りをほぐしておられたようでした。

養蚕部屋

蚕の卵は普通「種」といいます。K社から求めた種が孵化すると真っ黒い体長一ミリメートル程の毛蚕が出て来ます。その毛蚕を羽根箒で掃

第二節 養蚕

養蚕業の発達

明治時代生糸は横浜開港以来最大の輸出品となったので、政府は外貨獲得に役立てようとしてその増産と輸出に努めてきました。これに応じ果も養蚕業の育成策を推進したのです。

昭和のはじめ頃は、農家の七十七パーセントが養蚕に従事していて、この頃の農家経営の姿は、

- ① 田では表作として水稲を、裏作として麦を作ること
- ② 畑では蔬菜類を栽培
- ③ 畑のかなりの部分を桑園化して、春・夏・秋の養蚕に従事



部屋いっぱいの蚕

この三つで現金収入を図っていましたが、養蚕が収入の中心でした。戦後は復活して昭和三十年の養蚕農家は一七八五戸、全農家の四〇パーセント以上にも及んでいました。昭和三十八年には「各務原市の農業改善五カ年計画」の一つの柱として位置づけられていましたが、昭和五十八年には戸数は激減しました。若年労働力不足、価格の下落、他作物による桑との競合によって衰退したのです。

きたて、柔らかい桑を刻んで最初は一昼夜に七、八回も与えながら母は細心の注意を怠りません。近所のお母さんたちとの協力と昼夜を分かたぬ努力の中で、蚕は一眠、二眠とその都度脱皮を重ねて成長していきます。続いて三眠、四眠を経て五齢期を迎えます。さあ、これからが大変です。桑の食べ盛りとなります。

「四度の眠り何時しか過ぎて、箸の太さも小指となりぬ、競い競い桑食む音、木の葉に雨の注ぐ如し」

かつて小学唱歌に唱われていたように、蚕は一斉に桑を食べます。蚕はほとんど成長するのでサナや目棚も次第に増やされ、わたしたちの部屋も次々と蚕に占領されて行きました。養蚕優先で一家の居住域は段々狭くなっていきますが、こうして上族するまでの約一週間は良い桑がたっぷり必要になってきます。もう女手だけでは間に合いません。あちこちの農家では父親が先頭に立ち、早朝暗いうちから桑取りに出かけました。日に二回、或いは空を眺め雨でも降り出そうものなら、夜半であっても出掛け、桑の枝を切って持ち帰り、家族総掛かりで葉をまぎました。

わたしの主人は、五歳の時父を亡くしたので主人の母は若くして未亡人となり、気が強く、評判の姑(主人の祖母)と後家さん二人で大百姓を支えて来たと言うことで女の身でさぞや大変だったろうと思えました。

蚕も沢山飼っていて毎日多忙の中で、桑盛りには幼かった四人の子供たちも、それぞれに手伝っていたそうです。中でも長女であった姉は、家事はもとよりのこと畑の草かきなどもしたのだそうです。そんなせいでしょうが、姉は年頃になって「わたしは絶対に、農家へはお嫁にいかないから」と言っていたそうです。

夜遅くまで切つて来た桑の葉をみんなでもいでいる時、子供のことでついうとうとした所を見て、手伝いに来てくれた主人の叔父（母にとつては小舅）に持っていた桑の枝で容赦なく「ピシヤリ」と叩かれて、姉は涙をこらえ桑をもち続けました。そんな我が子を側で見ながら嫁であつた母には何も言うことができなかったことが辛かつたど、わたしにはよく話してくれたものです。

上族（じょうぞく）

やがて蚕の体が透き通つてくると、繭を作るために桑の葉の上に出て一斉に頭を上げます。家族はまた急ぎ総出で蚕を箱に拾いモズの中へ入れてやります。苦勞して育てた蚕にも病気が流行することがありました。蚕が白く固まって全滅したり、蚕が腐つた年は「草箕くさみに何杯か、木曾川へ放かるより仕方がなかったよ。」姑は悔しかった昔のことをよく話しておりました。そのため、養蚕部屋や器具の消毒には昔も念を入れていた

養蚕道具



ようです。わたしの実家では時折ホルマリン消毒をしたことがあつて、マスクをつけ、目を押さえながら密閉した蚕部屋から走り出た母の姿を思い出します。健康な蚕はモズに入り美しい繭をかけています。当時アメリカへ輸出されていた生糸は太さ十二デニールと言われ、繭玉四、五個を併せて引いた斑まの無い細い糸で、良い繭作りと製糸の高い技術が求められていました。

繭（まゆ）

一個のまゆ

「小学五年生の孫が、友達と蚕を飼つたそうです。その蚕が、九個の繭を作つたのだそうで、籤くじ引きに当たつたといつて、一個買つて帰りました。十一月二日のことでした。糸にしてみましたところ、一二八〇・一六メートル。思つたより長いのに驚きました。一ヶ所の結び目も無く、蛹まゆごになるまで一本のきれいな絹糸になりました。私も三十余年蚕を飼ひ、糸も作りましたが、繭一個だけで糸を作り、長さを計つたことは初めてなので、役には立たないけれど珍しく思い、残しておきました。」

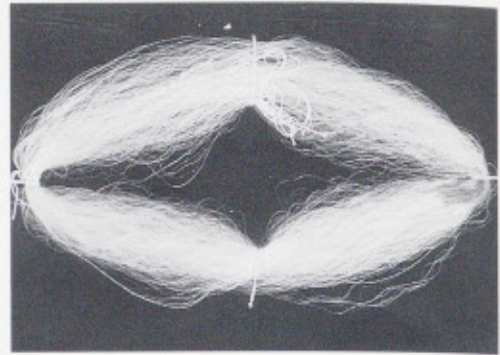
これは母の覚書ですが、蜘蛛の糸程細く見事な光沢と気品に充ちた絹糸の小さな束が、箆たがひの引き出しの中に大切に蔵われているのを見つけた時は、とても感動しました。こんなに細い糸を一度も切らずに最後の蛹になるまで引き続ける程、器用で糸ひきの上手だった母のこれは執念の遺作だと思ひました。

数日で、繭の中の蚕が蛹になるので、繭かきをしてモズから取り出します。繭の表面のふわふわしたハガをハガ取り機で取り、木綿袋に入れて棒秤で目方を計り、大きな籠に入れて村の公会堂へ運び、製糸会社へ渡します。普通十グラムの種から十九〜二十六キログラム程の繭が取れたと言ひます。

こうして今、目の前に眩しく真つ白く輝いている宝物のような繭の山を眺めて、女たちは今までの苦勞をすっかり忘れて、なにやらほかほかと喜びが湧いてきました。

或る時、姑からこんな話を聞いて驚きました。公会堂へ繭をもって行

一つのみゆからとれた生糸



くのは殆どが男性で、男手の無かつたわが家ではその頃まだ若い嫁であつた姑が、重い大八車に繭の籠を載せ、でこぼこの道を苦勞して公会堂へ運んだのでした。K社との取引を目前に控えてたむろしている男衆にいつものように気軽に話し掛けたものです。

「そろそろはじめて もらえるやろかねえ」人々は気のせいか目をそむけたようでした。夫が生きていた頃から、

本家としての気位を持ち、今日渡す予定の繭の貫数でも誰にもひけを取らないつもりで、いささか気負っていたかも知れませんが、「女が先に口利くこたならん、今日のまいは渡せんぞな」誰かの声でした。頭の中が真つ白になった姑がふと気が付くと、日頃何かと言ひ寄つて来た男たちの顔が歪んで浮かび、苛めなんだと感じたものの、世間知らずで弱い女を庇かばつてくれる人はありませんでした。とにかくこの繭を工場へ渡さねば一大事でした。繭の中の蛹はすぐに孵化します。そこで蛾は繭に穴を開け外に出て卵を産みますから、繭はもう売れません。ともかく、ここは頭を下げて謝る外はなかつたと思ひます。

大繭・屑繭

女性にとつて、養蚕の楽しみは、こんな所にもありました。大抵の農家では、汗水流して得た繭の代金のすべては一家の財源として家長の手で管理されてきました。ところが、大繭（蛹が二匹入つた繭）と屑繭は

女が自由にできました。屑繭は自宅などで糸を引き機はたに織りました。戦後の物資が乏しい時代に結婚したわたしには、母が仕立てに苦勞して、自家製の絹糸を業者に頼んでカベ縫かべぬいりをかけたり輪子りんごに織つて貰ひ、京都で染めて居りました。真綿は昔、綿入れの着物や、布団を作るときに用いて綿を繋ぐための必需品でした。またこれらは商人が買い集めて回るので小遣いもできました。

蚕糞さんふんは乾燥させて肥料とし、桑の木の枝や株は貴重な薪となり、その燠あつは火持ちが良いので冬季は炬燵こたつの火種として重宝しました。

姑が若い頃の失敗談はまだまだ聞いております。お祖母さん（姑の姑）が大切に蔵つておかれた生糸を、商人に唆そとされて、ついうっかり練ねりに出してしまつたのでした。お祖母さんは、自分の留守の間に嫁が勝手なことをした、とカンカンに怒り、そこは気の強い人の怖さ「死ぬ」と言ううと白装束で蔵に入り中から門かどを掛けて閉じこもつてしまつたのでした。これは繭に寄せる女の情念と人間関係の縫ぬいれが表面化したものでしたが、わが家にとつては重大事件であつたと思ひます。

おわりに

明治政府は国の財政を切り開くため、海外への輸出に着目しました。明治四年群馬県富田に最初の製糸工場を作り、フランスの技術者の指導を受けて最新式機械三百台を備え元士族の子女に技術を習得させました。輸出される生糸は規格が厳しく、富山亀太郎氏は外国産の蚕を交配させ、何度も研究を繰り返して、強くて長い糸作りに成功しました。その後ドイツ・フランスに蚕の病気が流行して、生糸の需要が急速に高まり、長野県の岡谷に製糸工場を作りました。農村の少女たちが集まつて来て、

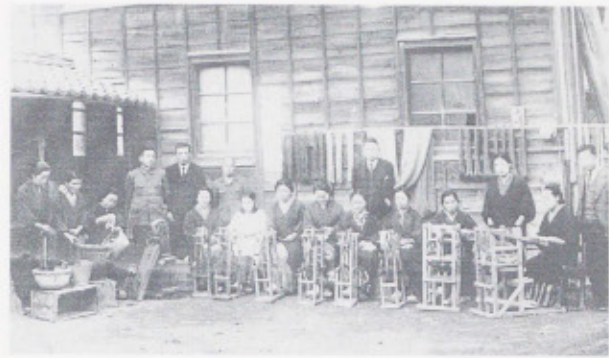
三万人を数えたと言います。彼女たちの中には、現在では考えられないような苛酷な労働に依り、病気になるったり、また亡くなる人もあって後には女工哀史の言葉も生まれました。

こうして輸出された生糸の利益は、我が国の鉄工業など重工業を始める基金となり、わたしたちの養蚕も国策にそってその一端を担い、知らぬ間に産業の振興にも貢献していたのでした。

当地各務原では野村の赤座近右衛門氏が豊橋に出て製糸工場を作りました。大正の頃は蘇原地区の少女たちがそこで大勢働いていたと聞いております。

その後アメリカ婦人の靴下は絹の素材から、新発明のナイロンに変わりました。また、内外の国際情勢は緊迫して貿易も不自由になり、生糸の輸出も閉ざされたようでした。昭和二十年太平洋戦争は終結して日本は大きく変わりました。戦後は食糧が不足して麦や甘藷の畑が一面に拡がり養蚕農家の戸数も減って桑畑の桑の木は根こそぎ引き抜かれました。また最近宅地化されて近所にも多くの住宅が建ちはじめました。わたしたちが、桑摘みの途中で見つけた桑母の、指や唇を紫に染めて食べたあの甘さとか、怖かった毛虫に刺されてたまらなく痒かったことなども、今は遠い思い出となります。

糸をつむぐ(蘇原)



ました。

第三節 商工業

一 那加一、六市

大正六年各務原に航空隊が設置され、大正九年高山線が岐阜より太田まで開通し、その中間に「那加駅」が開設されました。また、大正十五年各務原鉄道も開通し「新那加駅」付近が各務原発展の中心地となり、市街地として発展してきました。そして那加駅前の一層の発展を図り、市場組合を組織して大正十四年、毎月一、六の日を市の日と定め、一、六市が開設されました。市の立った場所は当初、日の出町通りの南半分及び中山道の松並木通り(神社境内)の四十戸程のバラックでしたが、その後出店舗も増加し、増築されて南組合、北組合に分かれ、昭和三、四年ごろには日の出町通りより、吾妻町通りまで約三百メートルの道路沿いに発展しました。店舗は種子、雑貨、衣料品などを扱う店が多く、一間(一・八メートル)の道路の両側に立ち並んでいました。

一、六市には町内はもとより、近郷近在から、また、鉄道を使ってやってくる客で芋を洗うほどの盛況であったといいますが、戦争の激化と共に廃止されました。

戦後昭和二十二、三年頃生活物資の不足、那加駅前の発展のため市が再建され、益暮れには「大売り出し」を催す程の活況を呈したといえます。しかしながら、近年商業形態の変化、大型店舗の進出等で出店者が減り、現在は種苗店、衣料店の三、四軒を残すのみとなってしまいました。また、店舗の取り壊されたあとは、町内の花壇となっている部分もありま

す。

種苗店主によると最初中山道南側の神社の境内に出店し、その後現在の場所に移転したとのことです。四季折々の花の苗、種子等求める客は絶えることなく元気なうちは店を続けたいとの事でした。このような市は加納、長良、太田にもありましたが、時代の流れか廃止されました。

一、六市で買い物を体験された方の文章がありましたので紹介します。

買い物

終戦後わたしが住む三ツ池町は、廃屋となった兵舎の材木などを色々の目的があつて持ち出す人達の姿がありました。爆弾の投下跡の大きな穴には雨水が溜まり、近くの竹藪の中には小さな飛行機が隠されています。軍のこの跡地に多くの人達が入植し、汗水流して開墾されている

姿をあちこちに見受けました。さつま芋畑や桑畑の広がる三ツ池町には、中心部にあたる国道二十一号線沿いに雑貨や食品、煙草など売る店が一軒あり、村の情報交換の場所でもありました。

わたしの男は孫を背負い買い物が出てこの店に出掛けて、色々な情報を聞き込んで来て夕飯どきの話題にしてみました。また二十軒駅のそばに自転車屋を預かりながら駄菓子も売る店もあり、ここもちょっとした村の人達の集まる場所でした。神明神社の近くにお婆さ

那加一六市



んが小さな間口に駄菓子を並べ、子供相手の商いをしていました。戦時中、男は自転車屋を営み、姑は川崎重工業に勤める人達の下宿屋をやっていたそうで、わたしが嫁いで来た時は二階には八つの部屋があり、食事のつかない下宿でした。その下宿屋も伊勢湾台風の後止めました。

その頃、那加駅の近くで「一」のつく日と「六」のつく日に、食品、衣類、野菜の種など商人達は狭い道筋に所せましと品物を並べ商いをしていました。わたし達はこれを「一、六市」といい買い物好きな姑についてよく出掛けました。

布団作りの好きな姑だったので、「もうちょっとまけてくんさい」などどやりとりを交わし布地を買い求めます。

ひとしきり駆け引きを交わし目指す物を買う、そこにはお互いに笑顔がありました。今は大型スーパーが進出し、三ツ池にも様々な店舗が建ちすつかり様変わりをしてしまいました。

店に入れば品物には正札がつけられ、一対一の駆け引きをする事もなく、何割引とか、増量など新しい商法が生れ、消費者も賢くなります。でも人と人のふれ合いはありません。

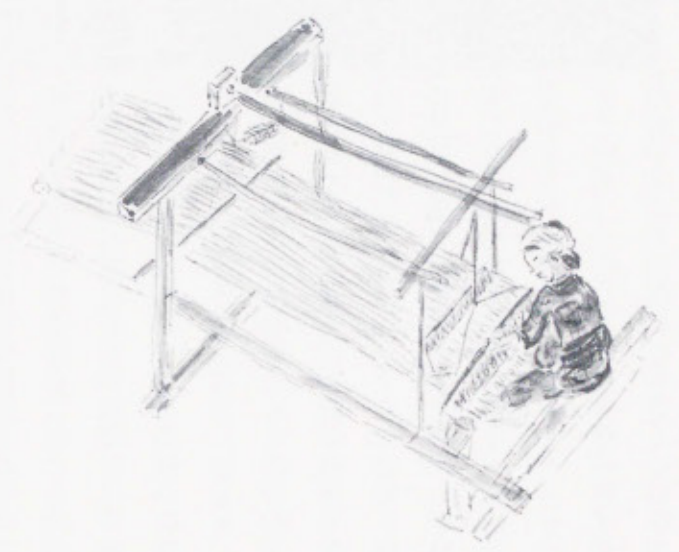
姑の「へえおおきに」と言い、商人は「負けですわ」と言いながらも双方に笑顔がありました。あらゆる品物を自由に求めることの出来る現代社会ではありますが、何か気忙しい思いもします。

二 工業の歩み

日清・日露戦争を機に産業革命が起こり、資本主義が強固になったと言われていますが、当地区ではそれ程の顕著な発展は見られず農家の副業としての家内工業が支配的でした。

農家の副業としての工業は現金収入源として行われ、その大部分は養蚕に伴う自家製糸と家用絹布の織布及び「問屋機」と言われた委託加工織物製造に従事したもので、手織機を使用した家内工業でした。

その当時の様子を示す文章を紹介します。



なつ

明治二十四年の夏、切通に娘が生まれました。名は「なつ」と名付けられ、長ずるに利発な娘となり、男子を凌ぎ遊びに学びに群を抜いていました。高等科を卒業すると近くのお針屋さんの師匠について着物の仕立、合間には百人一首や女性のたしなみを学びました。年頃となり縁あって現在の各務原市松本に嫁し機屋を細々と営む両親と共になつは機を手伝いました。姑は慶応三年生まれのなかなかのやり手、男はお人好しのため姑が切り盛りせざるを得ませんでした。当時は電気もなく手機でしたので時間はかかりかかり仕事ははかどらず、その上子供は次々に生まれ三男三女を授かりました。そんな折切通の実

し日本一と自慢してくれた人物でした。

昭和初期紡績工場で働かれた方の手記を紹介します。

わたしの少女時代

わたしは昭和の初め頃、小学校六年を卒業して紡績工場へ行きました。当時（大正時代、昭和初期）は、男子は殆ど高等科に進みましたが、女子は大部分の子が六年生で学校は終わって仕事に就きました。わたしの同級生の子は稲羽の機屋さんに行く人が多かったのですが、わたしは名古屋の紡績工場へ行きました。稲羽の機屋さんへ行った子は家から通えて良かったけど、わたし達は寮に入って、盆と正月くらいしか家へ帰れませんでした。十二歳くらいで家から離れてとても淋しくて夜は泣きながら寝ました。工場での仕事は早番と遅番があり、朝早くから夜遅くまで時間が長く辛かったことを思い出します。盆と正月くらいしか休みがもらえず、いつも眠かったことを覚えています。わたしは家へお金を送って家の家計を助けました。わたしがお金を送ると、父や母が大変喜んでくれました。仕事は辛かったけど盆や正月にお金をもって、お土産を買って父母姉妹の待つ家に帰ると、家中が喜んでくれ嬉しく誇らしげに思ったものでした。

一緒に工場に入った人は皆七、八年は働きました。その上家へ送った残りのお金を少しずつ貯めて、嫁入り道具を買いお嫁にいったものです。一方寮には、裁縫の先生が居られ、仕事の合間に裁縫を教えて貰いました。その当時は、女の子はお裁縫ができないとお嫁に行けないと言わ

家に帰る道、今の成清町からリズムカルな織機の音が耳に入ってきました。なつは矢も桶もたまらずこのような織機で機織りをやりたいと主人や両親に懇願しました。けれども答は「ノー」、きつと資金面で融通が付かなかったのでしょうか。

その後どうして工面したのか分かりませんがとうとうお許しを得て、小さな工場を建て住家も工場の中で、念願の機織りが始まりました。子供は姑に預け夜昼なしに働き子供の衣服は当時和服でしたが、破れを繕い仕立て直しいつもさっぱりした服装をさせました。こんな折三女の久栄が四才で他界、悲しさを味わいました。

実家からは見かねて食事や繕い物の手助けもありました。娘を思う親心は昔も今も変わらぬようです。この頃不況の波が押し寄せ、せっかくの製品が売れず鉄道自殺まで考えたといひます。（大正八年頃）その後何か軌道に乗り子供も成長しましたが、時代は戦争へ突入、長男が出征、娘達も手伝い更に女子の織子さんも入れて漸く楽になりました頃、なつは体をこわして半年ほど休養しました。その間姑は何かと手伝ってくれた事は言うまでもありません。

次男、三男と戦争に行き、とうとう機を止め国に供出することになりました。国からきた人が織機をハンマーで壊す音に涙が出ました。その上長男は戦死、次男は負傷と国民皆味わった悲しみを経て終戦になりました。

次男、三男にも嫁を迎え、ようやくなつにも安堵の日々が訪れました。明治の女は強く懸命に生きたのに報われることも少なかったように思われます。なつと言う女性は賢くて愛があり嫁をこの上なく愛し頼りと

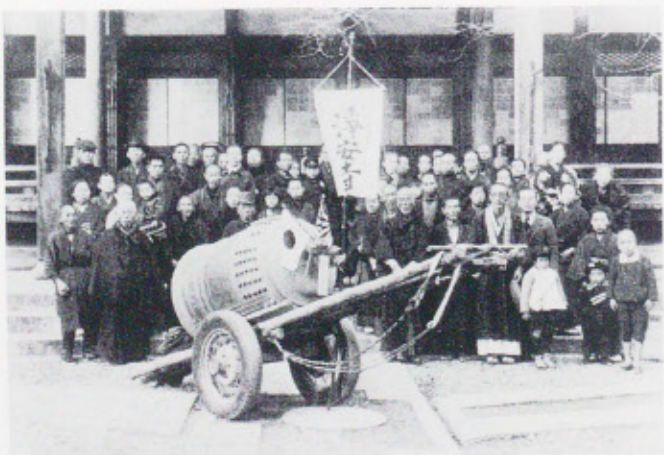
れていましたので一生懸命頑張ったものです。次第に大きいものも縫えるようになり嬉しくなり友達と話が弾んだことを思い出します。次に前渡地区で絹織物業に専念された方の手記を紹介します。

機屋の思い出

絹は女性にとつて憧れの織物であると思います。戦後の復興に始まりやがてバブル時代の幕開けとなりました。絹織物も当然織れば織るだけ確実に収入も増えました。

戦時中太平洋戦争が熾烈を極め、武器製造の為どの家も織機を国に供出して、軍需工場に働きに出ました。仏具や釣鐘を出したのもこの頃の事であったと思います。

昭和二十年八月十五日、日本は敗戦国となり、戦争が終りました。私は翌年の昭和二十一年四月五日、前渡町のこの家に嫁いで来ました。新婚旅行は、犬山の花見でした。結婚した翌日からもう畑仕事です。お寺の藪の開墾でした。食糧事情が悪く少しでも土地を広げ、六人家族の腹を満たすために懸命に働きました。雨の日は着物を縫い姑はその



釣鐘の供出

腕具合を見ていたようでした。

そんなこんなの日々でしたが、二十二年頃からそろそろ、機織りをする家が出始めたので、私の家でも機織りをする事にしました。もともと夫は機織り職人でしたから「昔操った杵柄」とでもいいでしょうか、最初は手機で縞の木綿の反物を織りました。一日も早く動力機織機が買えようにと懸命に働きました。やがて念願の動力機織機を一台買うことができました。当時（昭和二十二、三年頃）で一台二万五千円程だったと思います。貯えたお金は全部機織機に支出しましたので、糸を買うことが出来ず夫が再三、再四、糸屋さんへ出かけ、事情を話し頼み、ようやく前金無しで絹糸三十キロを出してもらいました。最初は加工賃を貰うだけの仕事でしたが、余録に出る糸で織った反物をブローカーが高く買ってくれました。輪子一反千円程だったと思います。絹織物の全盛期ということもあってブローカーがついているのです。その後自分のお金で糸が買えるようになり、寝る間も惜しみ機織機をフル回転させたものです。私たちの寝所は別棟だったので眠っているとばかり思っていた子供が目覚まし泣いていたのですが、機械の音で聞こえず、隣家の人が連れてきてくださった事もありました。その頃は布機織機だったので、おしっこでぐっしり濡らし泣いている事も度々でした。おんぶして働いたあと背中からおろしたときは一人はなんと軽いのだらうと思ったことです。化粧もせず小遣いを節約し、唯々機織機を増やすことに専念しました。眠くてもとうとうとした瞬間機械に頭をぶっつける事もありました。たまに実家に帰ると親や妹に子供を守って貰いひたすら眠りました。両親は眠るだけの実家だねと言っていた事を思い出します。機屋は儲かると世間の人

三 運送業

もう一つ農家の副業として昭和初期までは馬車による運送業がありました。今では牛や馬は大変少なくなりましたが、当時は物資の流通をはじめ農耕などに牛や馬はなくてはならない役目を果たしていました。今も市内の道ばたとか路地を入ったところに、馬頭観音がほこりをかむって立っています。これをみても当時に牛馬が大きな役割を果たしていたかが分かります。

当時馬車での運送業を営んでおられた方の文がありますので紹介します。

大切な家畜

わたしの家は夫が馬車を扱っていらしたので、馬はいつも家にいました。今という運送業です。

昔は物資の運搬はすべて馬や牛でした。だから家の者も馬を大切にし、家族の一員のようにして可愛がったものです。馬もそれをよく知っていたのか、可愛い目をしてよく言うことを聞いてくれました。

馬が病気にでもなったら大変で、当時獣医は滅多とありませんでしたので、主人もわたしも徹夜で看病しました。腹痛などの時は、竹筒を斜めに切ったものに薬を入れて飲ませたり、馬を眠らせないために轡の両側を綱で引っ張ったり、腹巻きをしたりして介抱しました。

当時はいろいろなものを運びましたが、主人は須衛などから瓦をよく運んでいました。瓦は十枚束になっており、一束七貫目（約二十五キロ）くらいのを八十束から百束運びました。

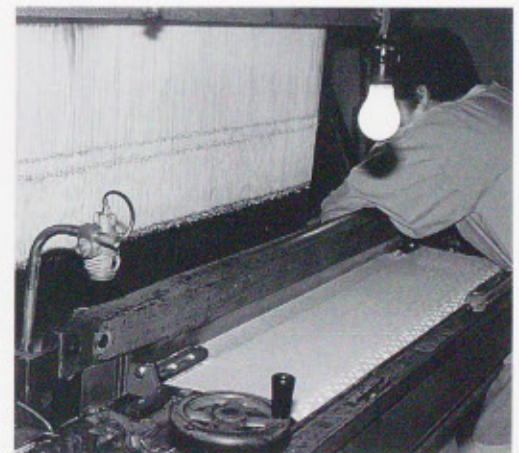
また、ときには切ったままの長い竹を尾張まで運んだり、遠いところでは泊まりがけて信州（長野県）まで鬼瓦を積んで運んだこともあります。

達は言っていたようですが、自分の体をすり減らすようなものだったと思います。子供達も同様に本当によく働いてくれました。

昭和三十年代に入り景気にも翳りがみえ始め、中国や韓国から半値近くの絹糸や絹織物が輸入されるようになり、わが家では昭和の終わり頃には生活費程度の収入となり、息子も四十代後半ともなれば転職にはぎりぎりの年齢ですので、考えた末平成五年にこの仕事に見切りをつけました。

早く廃業した家では政府から補償金がでましたが、最後まで残ったわが家では、補償金どころか解体費を払ったほどでした。現在前渡では二、三軒カーテン地を織る家がありますが、絹を織る家はありません。今にして思えば華やかな思い出も心のゆとりを持つ暇も無く、何を目標に我武者羅に働いてきたのだろうか、それはやはり戦中戦後の貧困生活の明け暮れに追い立てられていたのです。

しかし今は、辛かったことも、時折懐かしく思い出します。いまは好きな趣味を楽しむ充実した日々を送っています。最後に今でも私達の織って作った純白の絹製品は、どこの国の製品にも絶対劣らないと自負しています。



動力機織機を使って

朝は五時には家を出ますので、

日の短い頃は約四キロ先の羽場のあたりで夜が明け、それまでは提灯をともしで行きました。

わたしは毎朝四時には起きて食事の準備をしたり、弁当を詰めたりして大忙しでした。



馬小屋（旧桜井家）

主人を送り出すと、わたしは田と畑は自分の仕事だと思って働きました。勿論農繁期等は主人も手伝ってくれましたが、野菜などはなるべく絶やさないようにと私なりに考えて作り、畑の草ひき、田の草取りと結構忙しい毎日でした。

一番大変だと思った仕事は大麦のはじか落としてでした。よく干した大麦を一ヶ所に集め、マンリキで六、七月頃が一番暑い三時頃に叩くのですが身体の中に入ってきてかゆくてたまりませんでした。お風呂にはいるまで辛抱しなければなりません。田の草取りもモンベのない時などは稲の葉で内股が擦れるので、お風呂にはいると湯が傷にしみてつらく、また葉でつき眼をしたりして苦しい思いをしました。遠い所まで馬と一緒に歩いて主人を思って懸命に働きました。

また、我が家では牛馬は運搬だけでなく農耕にも使いました。あるとき人に頼まれて、田植えの頃でしたが田掻きをしていたら鞍がうしろにずれて馬の尻に引っかかったので馬が驚いて農具を付けたまま走り出し、溝にはまって脚を折ってしまい、脚を折った馬はもう使いものならず、

安い値で引き取られていきました。本当に可哀相かわいそうで涙したものでした。
 当時我が家では馬を家族同様に思っていましたので、子供であった長男も、朝食前に馬に食べさせるための草を籠にいっぱい刈ってきたり、夕方帰る頃には湯を沸かしておいて馬の脚や身体を湯で洗ってやったりしました。夏などは蚊に刺されないように、よもぎの乾燥したものや、桐殻をいぶし、蚊を防ぎました。
 主人はどんな日でも、馬に食べさせてからでない朝食はとりませんでした。

この家の庭には今でも馬頭観音の碑が建ててあり毎朝水を供えたり、花をたてたりして供養されています。

今では全く見られませんが、昔は大人も子供も一緒によく働いたものです。

馬頭観音の碑



第三章 行事と女性

第一節 正月の行事

第二節 春・夏の行事

第三節 秋・冬の行事



第三章 行事と女性

二十四節気と行事

広大な宇宙の星、美しい緑の地球の上に、人類は生を受け、生きてきたその長い歴史があります。昔の人は、自然に学び天体の動きや季節の移り変わりを見つけて一年を定めました。又二十四節気を作り農耕の目安としました。そして耕し、種を蒔き、豊作を喜び神に感謝して季節のものを供えました。また一方では災害をもたらす天を恐れて神に無事を祈りました。

節供は節句となり、後には五節句として人日(七草)、上巳(雛祭り)、端午の節句、七夕祭り、重陽の節句などができると女性は楽しみながら家族の出世や、幸せを祈り、節句を祝いました。村では祭りを中心として数多くの行事が催されてきました。

長い間先祖から伝えられてきた各務原の行事は自然を生かし何れも地域の人々が楽しんで暮らせるように作られています。昔の人が山に残った雪の形から田植えの時期が来たとか、桜の花が咲いたら豆を蒔くなどの言い伝えは今も残っています。女性は家族のため、行事に合わせて早くから衣服を縫って晴れ着や下着などの用意をしたり、髪飾りを買ひ、履物を揃えるなどすべての用意をしました。

今ここに一年間の女性の関わる行事を表にしました。生活様式の変化と共に自然消滅した行事も少なくないのに気付きますが、現在もまだ多くの行事が受け継がれています。それらの中には地域独特の楽しいものも多く、これからも市民の誇りとして守り、後世に伝えていきたいと思っています。

2月	1月	行事
無縁法事 節分 初午 針供養 筆供養 山の講	成人の日 左義長 鏡開き 七日新月 初売り	行事と女性の仕事 御屠蘇、おせち料理、お年玉支度、神社お参り。 新年挨拶回り、家族の晴れ着の支度着付け。 仕事始め、籤引き、書き初め。 七草粥作り。家族の健康に注意する。 鏡餅を切る。水餅、細かく切ってあられにする。 門松、しめ飾り、古い神札、書き初めを燃やす。 満二十歳の息子、娘の晴れ着の支度着付け。 豆を炒り家庭で豆まきをする。 養蚕の願、蚕の供養、米の粉で繭団子を作り供える。 稲荷神社で餅まき。 先祖の供養、当番は準備をする。 針仕事に使う針に感謝して豆腐に針をさす。 筆塚に納める。 山の神を迎える。共有林へしめ縄赤飯を供える男子の宿当番。



二十四節気と五節句

◎二十四節気

◎五節句

夏至	芒種	小満	立夏	穀雨	清明	春分	啓蟄	雨水	立春	大寒	小寒
冬至	大雪	小雪	立冬	霜降	寒露	秋分	白露	処暑	立秋	大暑	小暑
				重陽	七夕	端午	上巳(雛祭り)	人日(七草)			
			九月九日	七月七日	五月五日	三月三日					



6月	5月	4月	3月
農休み 田植祭り	戦没者 慰霊祭 端午の節句	花祭り 春祭り	ひな祭り 春分の日 厄払い
食事。昔農繁期には六回も食べたと言われる。田植ぼち、おはぎ、うどん。 田植で疲れた体を休める日。機械化のため消滅した地区が多い。がんどぼち(さんきら)を食べる。	こいのぼりを立てる。五月人形を飾る。菖蒲湯、ちまき、柏餅、小豆飴。蓮と菖蒲を軒にさす。 戦没者の追悼式の支度出席。	神輿を作り町内を回る。はちまき、法被、履物、酒、ご馳走を用意する。 灌仏会。白象に花を飾り寺を回る。甘茶、桜餅、よもぎ餅、いろいろな団子を作る。	おひな様を飾る。あられ、甘酒、赤飯、ひし餅、桃の花、お菓子。 お彼岸団子、よもぎ餅、先祖の供養、墓地清掃、お寺参り。 おだいびつに松の葉を用意する。 厄年の男子。紅白の餅を沢山まく。

9 月	8 月	7 月
仲秋の明月 秋の彼岸 秋の種まき	雨乞い お盆 精霊流し	七夕祭り 虫送り 土用 池祭り
母の在所は隣村でした。毎年盆、正月前には決まってお祖母さんが両手に風呂敷包みを下げて、徒歩でやってきました。孫たちにお歳暮を持って来て、嬉しそうに 「おせつにはなあ お祖母さんとこへ来てくんさいよ」と言いながら一人ずつ頭を撫でてくれました。正月にはお節と言って嫁いだ娘たちが在所へ招待され、それぞれが子供たちを連れて賑やかに集い楽しみました。女性にとって両親と共に在所は心の休まる憩いの場でした。 子供たちの気になる風呂敷包みの中には、真っ白い兎の毛のついたハナカワの下駄の上に、別珍の赤い足袋が載せてあり、サイズもそれぞれ年齢に合わせて子供の数だけきちんと入れてありました。当時お祖母さんには十七人の孫がいて、どの子にも平等に贈り物を持って行くのですから大変だったと思いますが、これくらいが当時のしきたりだったと思います。わたしは子供は大喜びで、正月が来るまで枕元に並べて寝ました。その頃は正月が遠くからやって来るものと思い、母と一緒に「西の山までござった」と歌いながら楽しんで待ったものでした。 しかし大人は刈り入れた稲を玄米にして俵に詰めるまで手作業で幾つかの工程を経なければなりません。戦前は旧正月が普通でした。大掃除、すすきはらい、餅つきなど年末の行事はすべて旧暦でやりました。では師走の餅つきの様子を書いた文を紹介します。	短冊に願い事を書いて竹箆につるす。里芋の葉の露で墨をする。七夕提灯、野菜で動物を作って供える。はつ七夕は子供の勉強がよくできるようにと願って行う。箆を川へ流す。害虫駆除。田畑、衣服、書物。虫封じ、病氣封じ。 丑の日、鰻、牛肉、餅を食べて暑気払。梅干は土用に干すとよい。衣類の土用干し。 川祭り。川面に船が出て水神宮に祈る。 花火大会、鯉みこし。	日照りが続いて作物が枯れないよう必死に雨を乞い、鐘や太鼓をたたいて踊る雨乞い踊。草刈り、墓掃除、迎え火をして先祖の供養をする。盆提灯。土用餅をつく。三日間先祖供養。灯籠流し、送り火、親族交流、嫁の里帰り。奉納子ども相撲。

第一節 正月の行事

お正月様どこまでござった

餅つき

子供の頃のが家の餅つきは、先ず吉日を選んで母は前日に餅米を洗い、

12 月	11 月	10 月
報恩講 山の神講 冬至 すす払い 夜回り 餅つき	新嘗祭り 七五三祭り	秋祭り
親鸞聖人のお仏事、お寺参り。共有林へ山の神様を送る。冬至かぼちゃを煮て食べ、ゆず湯に入り家族の健康に気をつける。 大掃除。一年間のすずを払う。神社のすす払いに参加する。 年末行事の一つ。火の用心。各家で杵でつく。 門松、しめ飾り、お正月を迎える準備。 大掃除、墓掃除、買い物、家族の衣服等用意。おせち料理、年越しそばなど準備。除夜の鐘。	新米、黒米、餅米、新酒を供える。秋の収穫を神に感謝する。 子どもの成長を願って神社に祈願する。晴れ着を着飾って千歳飴を持った記念写真は一生の思い出。各神社のお札を神棚に迎える。	みこし。笛、太鼓練習。法被、はちまき、晴れ着履物準備。神楽に合せて浦安の舞稽古。子ども歌舞伎稽古、衣装準備、試菜、本菜。黒紋付袴、赤飯、酒肴、食事用意。



家庭でもちつき

一晩水に浸けておきました。家の中の土間にはきれいに洗った石臼が置かれ、餅をつく杵もバケツの水に浸してありました。台所の畳を上げて箆を敷き、その上にまたござを敷いて、餅にわらごみがつかないように準備がしてありました。
 翌朝母は午前二時に起き、かまどに清めの塩を供え、三升釜をかけて湯を沸かし始めました。用意しておいた太い薪をどんどんくべて、昨日バケツの中に浸しておいた餅米を米あげ(ざる)に移して水を切り、一白分(三升)ずつ計ってせいろに入れ、それを二段重ねて積み釜の上に載せます。上へ湯気が上がれば下のせいろが先ず蒸し上がるので、手早く石臼の中へ逆さにしてポンとあけ熱いうちに杵で搗きます。火勢が強く釜の湯が蒸発して減るのでそのつど水を差して(加える)、次のせいろを載せ下側が蒸し上がって餅をつく、せいろを載せる、軌道に乗っていると息つく暇もありません。こうして慌ただしいわが家の餅つきは父母の手で手際よく進められ、子供たちが目を覚ます頃にはつき上げた餅が

十白ぐらい、のし餅にしてごの上に乗せてありました。また、梗米を混ぜてついた強餅や、きびや大豆や粟餅などもつき上がって、八畳間はいっぱいで足の踏み場もありませんでした。

これらは翌日、母がほどよい固さのうちに四角く切って立てかけるようにして並べていましたが、寒に入れば水餅にしておりました。母はいつも気を付けてかびないように時々水を替え、冷たくきれいな水の中で春を越させて農繁期のおやつになったこともありました。切れ端は細かく切って乾燥させ「あられ」にしてひな祭りにも用いました。

こうして餅つきが無事に終わることは、来年も息災に過ごせると言い、母が気持ちを込めて行動していたことを思い出します。

年越しとおせち料理

年越し料理



「大晦日の夕飯は、早めに済ませて三里歩け」実家の父の口癖でした。母は朝早くから年越しの掃除や、正月の準備に追われてしまい、どんなに急いでも短い冬の日は早く暮れて行きました。

年越しの料理は、人参、ごぼう、里芋、大根と豆腐や、油揚げ、刻み昆布

などを一緒に煮付けたものと、めざし(鱒)が一般に用いられたが、深い味わいがあった今も懐かしく思い出します。

ところが、最近はずき焼きや、しゃぶしゃぶなどを好む家庭が多くなり、また、男子も昔は禁じられていたかもしれない厨房に入り易くなりました。

おせち料理は大晦日に作りますが、定番の田作り、黒豆、昆布巻など煮るのにも、時間がかかるし、上手にできないのでいつも主婦たちは苦勞し、手間暇掛けて念入りに煮込んだり、丁寧に料理をしました。その他にも、なます、数の子も含め、冷蔵庫の無かった時代に正月三ケ日は充分保存が効き、来客の酒肴にもすぐ間に合うように工夫がなされていたようです。

旧正月

元日は四方拝をして、穏やかに昇る初日の出に手を合わせます。清々しい朝「カラコロ」下駄の音が響きます。男子も女子も、和服を着て下駄を履き、子供は羽織の紐も解けたまま夢中で凧揚げ、独楽回し、羽根突き、雀つきなどしました。旧正月は寒い季節で雪も降りました。室内ではカルタや、双六で遊びました。テレビはありませんから、寒い野外で遊ぶことが多かったのです。

ここで七草粥を作るお嫁さんの文を紹介します。

七草粥

農家の朝は早く、嫁は姑の起きられる前の暗いうちに起きて、朝食の仕度をしていました。

一月七日は早朝から粥を炊いて準備をしました。珍しく台所に立たれ

た姑の声に合わせてリズムカルに、とは思うものの算盤の代わりに慣れない包丁を持った手は、ぎこちなく銀行で紙幣をさばいた手際も何処へやら、スピード感覚のみを頼りに夢中でただ組を叩いていました。まだ何も知らず若かったわたしには何もかも珍しくて、その時の姑の歌声を今も懐かしく思い出すことがあります。

なすな七草とうどの鳥が 日本土地に
上がらぬさきに すとんとんとん
三回歌って出来上がった粥の中へ刻んだ緑色の七草をバラバラッと振り入れて、七草粥が出来上がりました。それは家庭の食卓を暖め、安らぎをもたらしてくれました。

小豆粥

一月十五日は、前日煮ておいた小豆を朝食の粥に混ぜて炊きます。十一日の鏡開きにお下げした鏡餅を、水に浸して柔らかくし、小豆粥に入れて煮る家もありました。

その日の朝食の前に、予め小豆粥を茶碗によそっておいて「なるか、ならんか、この飯食ってなあーれ」と無心に唱えて、屋敷内の実のなる木の股に供えたものでした。これは、なる木責めであったことを後に知りました。

昔の人は、一、二月は毎朝餅を食べていたようですが、そんな時に消化の良い粥を食べるといふ行事があるのは気が利いていると思います。春の七草はこの季節が一番あくが強いと言ふことでその刺激により消化を促すことが解って来ました。このように行事を通して自然に体調を整えるなどと、考えれば昔の人の言い伝えや、生活の知恵には、感じ入る

ことが多いものです。

第二節 春・夏の行事

雛祭り

親王様を囲んで木箱に入った人形たち、気品のあるその中には歌舞伎の怖い男雛も混じっていました。大好きな汐汲み人形の前で飽かず眺めていた幼いわたしには三月三日の夜、人形たちが木箱に納められるのが淋しく辛かったことを覚えていきます。

昭和二十三年結婚することになり、女の子にも恵まれました。戦後間もない頃で、物資は乏しく、出始めたばかりの御殿飾りも何やら気が進まず、合理的な姑の意を汲んだ実家の両親は質素ながらもやはり娘の初節句ですから大きめの立派なケースを特注し、孫の幸せと成長を願って「おひんなさま」(おひな様の方言)の節句を祝ってきてくれました。おかげで娘はいつでも自分の部屋に飾って大切にしておりました。

その娘に長女(孫)が誕生しました。わたしのお節句からみれば半世紀を過ぎています。戦争を挟んで長い苦難から立ち上がった日本は経済的にも豊かになり、文化も向上しました。雛飾りも高級化し、その美しさ



ひな祭り

に魅せられます。足元にまだ雪の残っていた一月、岐阜、那加、犬山の
人形店を夫婦で見歩ききました。

三月三日の孫の雛祭りの祝いには娘の嫁ぎ先に招かれました。雛の御
殿飾りは座敷いっぱい置かれていて、婚家は大喜びでした。開け放た
れた次の間にも素晴らしい古雛の御殿が並べられていて、互いに気高く
美しく調和した雛飾りの前で楽しく節句を祝うことができました。この
孫が健康で幸せに暮らしていけるようにと心から思いました。

蓮如さま

下中屋の河野西入坊は大谷派の古刹で、長徳二年(九九六)源信和尚
と順智坊の草創と言われますが、昔から、蓮如さまと親しまれ、四月二
十五・二十六日御開帳には善男善女が集まり、門前市をなしたと言われ
ます。参道には、ぎっしりと屋台が並び、名物の植木市は木曾川堤防ま
で続いていたと言われます。

蓮如さまと言えば「ぶんたこ(草餅)がつきもので広く知られており、
お客さまへの何よりの御馳走として喜ばれ、いつの間にかそれがしきた
りとなって、何処の家でも、ぶんたこを作り、お客さまの帰りの土産に
もなりました。

このぶんたこは、全部手作りでした。先ず餅米とうるち米を半々位ず
つ用意しそれを洗い、よく乾燥させ挽き臼で粉に挽いておきます。前日
には道端などに生えている、蓬の若葉を摘んで来て洗っておきます。ま
た小豆はゆでてあくを抜いて柔らかく煮ておきます。

翌朝、祭りの当日女性たちは一斉に早起きをします。

「わたしは三時に起きたよ。」「わたしは二時半やったわ。」などと

たことは言うまでもありません。

西入坊の境内には天然記念物の大銀杏の木があつて、秋には美しい黄
葉を見せますが、このように蓮如さまの賑わいの中で人々の信心が増し、
子供たちにも信仰心が培われて、先祖を敬い心の拠り所として寺院が益々
繁盛し、大銀杏が何時までも元気で繁栄するようにと願っています。

端午の節句

四月の始めわたしは芋ヶ瀬街道を東へ走っていました。その車の窓か
らふと遠い民家の屋根に泳ぐ鯉のぼりを見つけて近頃あまり目にしなく
なった珍しさから、是非近寄ってよく眺めたいと思いました。

車から降りた瞬間、どきっとするほどの豪華さに目をみはりました。
芋ヶ瀬の池に近い民家の屋根を五色の色鮮やかな吹き流しや、金色のう
ろこをくねらせて威勢よく泳ぐ真鯉や緋鯉たち、いかめしい定紋入りの
大幟は、はたはたと風に鳴り、小旗に描かれた鍾馗さんは悪魔を睨みつ
けていました。

空を泳ぐ鯉のぼり



「随分ご立派ですね。これっ
て毎日掲げるの大変ですよ」
突然見知らぬ女に声を掛けら
れて、戸口から出てきたお嫁さ
んならしい若い女性は、戸惑いな
がらも笑顔を見せました。
その時わたしは長男のために
毎日鯉のぼりをあげていた、若
い頃を思い出しました。それは



蓮如さま

後で話題になったりした
ものですが、四月はもう
暖かくなっているのので、
食物がいたまないように
気を付けていました。冷
蔵庫など家庭にはなかつ
た頃で、料理はどうして
も当日作らなければなら
なかつたので、当然ぶん
たこは早めに作り上げ、
煮物も一通り昼前に拵え
てしまいましたが主婦
の責任は重大でした。何
処のお母さんも笑顔を見せながら今日の仕事が無事に終わるようにと心
で祈っていたかと思えます。

昨日煮ておいた小豆に砂糖を入れ、焦げ付かぬようにかき回しながら
程良く煮詰め、冷まして小さく丸めておきます。蓬は柔らかくゆであら、
包丁で叩くようにして切り、臼で軽くつきまます。米粉は熱湯で固めにこね、
大きく取り分けてせいろに入れ、蒸し上がったら臼に移し入れ、蓬と一
緒につきますが、蓬が全体によく混ざるように手返しをして鮮やかな緑
になった皮を掌の上で平らに伸ばし作っておいたあんをのせ上手に丸め
て仕上げます。家族や親類の数によっては、二百個くらいは作っていた
のかも知れません。お客様をもてなすために女性たちが夢中で働いてい
って来ました。

昭和二十五年頃のこと、長男の端午の節句を祝って、実家の両親が長
い青竹と一緒に初孫へと持って来た長い五色の吹き流しや大きな鯉幟が
目の当たりに浮かび、大空を見上げるわたしの胸に爽やかな気持ちがあ
つて来ました。
鯉の滝登りは中国の竜門の故事(竜門は黄河の上流にあり、これを登
ることの出来た鯉は竜に化すと云う)から立身出世の象徴のようにされて、
画題にもなってきました。江戸時代から、鯉のぼりを独立させると徐々
に大型化して十八世紀の末頃から、鯉のぼりや、吹き流しを立てること
が流行しました。鯉のぼりは明治頃まで大半は紙製でしたが、後には木
綿製となり、最近では繊維が多く使われて、きらびやかに金銀を交え、大
小の旗のぼりも立てられて、豪華になって来ました。当地では男児(初孫)
の誕生を祝い、健やかな成長を願って母親の実家からこのようにお節句
祝いを持って来るのが通例となっていました。そのため周辺の民家では
新旧、大小さまざまな鯉のぼりが空にあげられていて、四月の風物詩と
なっていました。

鯉のぼりは毎朝あげて、夕方下ろしましたが、何処の家でも主婦が先
立ちで世話をし、毎日たたんだり、片付けたりしていました。長男が
小学生になっても次男があれば、続けて立てました。わが子の健全な成
長を願う母心は決して労を惜しむことはありませんでした。

しかし、近頃は五月人形などの座敷飾りが多くなり、少子化が進み、
鯉のぼりの数は著しく減少してきました。

五月五日は子供の日となり、母親が赤飯を炊き、蓬餅を作って「ちまき」
などと一緒に供えているのは嬉しいことです。

禅宗のお盆

お盆の用意は八月に入ると始まります。

八月上旬に墓施餓鬼があります。各家のお墓はその前にきれいに掃除がなされます。墓施餓鬼の当日は共用の部分の清掃、草取りを信徒総出で行います。その後、お寺さまによるお経があげられ、先祖の供養が行われます。

十二日には「お施餓鬼」がお寺で行われます。その日は家族揃ってお寺に出かけます。「〇〇家先祖代々」と書かれた卒塔婆とお供えのお下がりをいただいて、お墓へ持って行ってたてます。戦没者のある家は、午後に行われる戦没者供養にお参りします。

お盆は十三日から始まります。女性は仏壇のお道具をきれいに磨き、ご先祖様のお位牌を全部前へ出します。四・八（八畳間が四つ）の座敷を明け放してきれいにし、盆提灯を飾ります。お供えはうす板の皿に麻のくきの箸を、お位牌の数だけ揃え各々にご馳走をのせて供えます。

十三日の夕暮れに迎え火を門の所か、座敷の前で焚いてご先祖様を迎え入れます。家のあるじがお経をあげ、家族揃って仏壇にお参りをします。

十四日の朝、お寺様、庵主様に来ていただいてお経をあげてもらいます。十四日と十五日は朝、昼、晩とそれぞれお位牌の数だけお膳を揃え、お供えします。ご飯、味噌汁、煮物、酢のもの、丸揚げ、十六ささげの胡麻和えなどいろいろ献立を変えて盛り付けます。先祖の多い家は、お膳のお供えだけでも大変です。

分家した息子や、嫁入りした娘たちがそれぞれ子供や孫を連れて在所（実家）へ帰って来ます。十四日から、十五日にかけては一族揃って大賑わ

きて切る、刻むなどから煮物、赤飯の下ごしらえなどがあるのです。

当日は朝早くおき料理に追われたものです。夜は泊まる客もあり主婦や女たちは客のもてなしに忙しく外出も祭り見物もできませんでした。

秋祭り（須衛）

須衛地区でも豊作への感謝や、伝統が代々引き継がれていて、祭りの行事が奉納されます。大正の初めの頃には舞台があり歌舞伎が上演されていましたが経営困難で廃止されました。

昭和三年、昭和天皇御大典を祝って牛に花を飾り境内を走らせたとも

聞きました。

紀元二千六百年（昭和十五年）には政府から祝い金が出て勇ましい花馬の行事が奉納されましたが、父が近衛兵だったのが、父が近衛兵だったのが、この行事に携わりました。そのため母が父の仕度を手伝い、祭りの法被などを縫っていたのが昨日のこのように甦ってきます。

昭和七年から十五年まで、青年団が行灯張りをして綺麗な行灯で祭りの

村国神社祭礼



いです。うち揃って仏壇にお参りし、お墓へもお参りに行きます。

十五日の夕暮れ、送り火を焚いて御先祖様を送ります。そして仏様へお供えしたものを川へ流しに行きます。しかし、今はもう耕地整理により、川もふたがされ道路になってしまいましたので、川へ流すことは行われておりません。

第三節 秋・冬の行事

秋祭りの準備

十月に入ると祭りの幟をあちこちの神社で見られるようになり、子供の頃を思い出して嬉しくなります。しかし女性は喜んでいる余裕はありません。一ヶ月も前から祭りの装束の手入れに追われます。今では少ないですが、昔は法被、羽織袴、袴などの繕い仕立て直しをしなければなりません。

座敷の掃除や、家の回りの草取り、障子の張り替えなども女性の仕事でした。

また一方女性は御馳走の準備に大わらわでした。畑から野菜を取って

夜を飾りました。又境内では映画を上映し大勢の人が楽しみました。

敗戦の戸惑いから立ち直った若者達に、元氣と明るい心をとの配慮から市内の各地では青年団男女の文化活動が活発化し、小学校校庭の仮設舞台で演芸も盛んに行われ盛り上がったものです。須衛地区では昭和十四年十月十日の秋祭りには神社の境内で青年団男女の芝居が演じられ、餅まきもあり、家々では親類の人を招いて村中が沸き上がりました。女性の裏方さんは大変でしたが皆誇りに思ったものでした。

昭和五十七年から手作りの「子供みこし」が誕生し、祭りの前日はおみこし飾りや花作りに親子が一生懸命努力しました。現在少子高齢化、後継者不足で祭りを取り巻く厳しい環境ですが、幼児から高齢者までが共に楽しみ会話が弾むのも祭りならではの楽しみです。

十月九日試案は子供みこしが地区を練り歩き、わが子の法被姿を追ってお母さん達が後に続きます。十日の本祭には八時に公民館に集合、老若男女揃いの法被でおみこしを担ぎ、賑やかに練り歩き神社に集結、神主さんのご祈祷を受ける習わしです。女性はいつの時代でもお祭りをしつかりと支えてきました。今後ますますと続けて行ってほしいと思います。

女性みこし（蘇原）

神社の祭礼も最近では、十月十五日に近い日曜日となり、夜みこしは、前日の土曜日の夕方から始まります。

六軒、旭町周辺の商店街には夜店の屋台が並び、たこ焼き、いか焼きなど美味しそうな匂いが祭りの雰囲気醸し出し、歩行者天国も人、ひとで賑わいます。そんな中を次々と繰り出される各種のみこしは、各々趣向をこらして威勢よくかつがれていきます。中学生のみこしもその中



お盆の折り

女性みこし



に入り元気よく回っています。灯りに照らされた人たちの顔や目がとても美しく輝いています。女性みこしのそのいでたちは白足袋に半ズボン、手製のピンクやブルーの鮮やかな法被姿で私たちも参加するようにになりました。最初は半ズボンにとっても抵抗がありました。が、勇気を出して挑戦したので。まだ珍しかった女性みこしは人々を驚かせたようですが、それも馴れてきて無心にもこしが担げるようになり、足元もきれいに揃うよう

何事にも挑戦してみることだと痛感させられました。先輩から学んだこうした祭りの行事を若い世代にも受け継いでいってもらいたいと願うものです。

山の神の思い出

蘇原の持田町で生まれ育ったわたしは、少年時代の思い出深い行事の一つに「山の神(山の子)」といって男の子だけによる一泊二日の合宿生活がありました。山の神は人里離れた林の中に鎮座されており、その神様を年に一度男子生徒で一泊二日の合宿を行って祀るものです。

合宿に参加するのは男子のみですが、合宿を行うにあたっては女性の助けが必要でした。食事に使うお米は近所をまわって集めます。夕方から全員が山の神の数え歌を歌いながら一軒一軒まわると、そのおぼさなたちがにこにこ声を掛けてくださってお米を少しずつ分けてくださいました。

合宿が始まると、宿をお願いした家に、母親が準備をしてくれた布団をもって集まります。上級生は食料品や景品の買い出しに出掛けたりで忙しく働きます。各自に役割が分担され宿の奥さんの指導で夕食作りをします。

「芋の煮えたは、箸さしや分かる、豆腐の煮えたは、浮きや分かる。」と宿の奥さんに歌うように節を付けて教えて貰い、面白かったので覚えてしまいました。

こうして出来上がった夕食をみんなそろっていたくのは、とてもしぎやかで楽しいものでした。

わたしたちの少年時代は、戦中、戦後の物資不足の時代で食料を手

になりました。

呼びもののコンクールは、みこしの工夫や、担ぎ手十六人の活発な動作などいろいろの点を審査されて順位が決められるのです。

わたし達も二位となりよい思い出ができました。みこしに参加するという小さな体験から調和とコミュニケーションの大切さを学ぶことができ、

山の子のお供え



入れるにも、また必要なものの準備にも大変だったと思います。そんな中での一泊二日の合宿は、宿をしていただいた家の親さんをはじめ家族の方々の、心遣いや手助けがあったからこそ無事に終えることが出来たのだなど今更ながらありがたいと思います。また、各家庭で忙しい中、薬や布団を準備したり、風邪をひかせないようにと陰から見守ってくれた母親の存在は大きかったと改めて感謝しています。

ます。又何のためらいもなく子供主体で全部任せてくれた、お父さん、お母さんたちの勇気と本当の愛情が分かり嬉しく思っています。

